

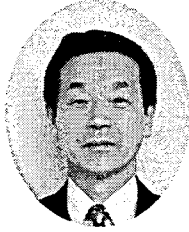
No.109
1995.
3.30

岐阜の博物館

編集兼発行
〒501-32 関市小屋名
(百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111(代)
振替 名古屋 6 37909

岐阜県博物館マイミュージアムギャラリーの構想

横山 勢津男



昨今、生涯学習時代の到来がいわれ、博物館も生涯学習施設の一つとして注目されている。そのためばかりではないが、美術館、資料館、記念館、科学館等々名称も種別も規模も設置者も多種多様ではあるが、博物館関係施設が続々と各地に新設されている。昨年全国の博物館数は、2千を越えた(日博協の統計)とされるが、他の資料では、5千とも7千ともいわれているようである。

もちろん、これらの数字は、博物館の要件により、大きく変動する。博物館法による登録博物館と相当施設に限れば、全国で7百館に達していない。岐阜県では博物館関係施設のうち、登録、相当施設は、合わせて12館であり、全国平均を下回る。ところが、その他の施設を加えると126館となり、一気に全国5位に跳ね上がる。これは、県下各市町村の多くが、地域の文化拠点やまちづくりの核に博物館関係施設設置していることと、さまざまな分野の収集家による貴重な収集品の公開、あるいは父祖伝来の文化財を展示するなど個性的な施設が県内各地に多数所在することによる。それに加えて、これら博物館関係施設の県博物館協会への加入率が高いことも上位ランクの背景にある。

たしかに岐阜県は、山間、川筋により地質や植生、歴史、民俗など小範囲な地域性があり、郷土館、資料館が存立する風土がある。また、美術工芸品や民俗資料、民芸品、化石、動植物などに恵まれ、収集家も多く、それらの展示施設の多くは、文字どおり設置者のマイミュージアムである。地域に根ざした公立館も、地域住

民の参加の部分が多いほどマイミュージアム意識が強くなる。小さな博物館が多い岐阜県は、そこそこにマイミュージアムがあると言える。

ところで現在、岐阜県博物館に「マイ・ミュージアム」棟が建設されており、7月には開館する。この建物の2階の「マイミュージアムギャラリー」は、県民にマイコレクション(収集、所蔵品)を展示・公開してもらう場である。県民の誰もが気軽に出品して自らの構想で展示し、来場者に解説もするといった個人の博物館を数週間開設してもらうのが趣旨である。ここへの展示を契機に、収集品を常設展示する小さな博物館を設ける人も出るかも知れない。あるいは来場の同好者相互の交流が生まれ収集に幅ができたり、興味を触発されて収集家になる人もいるだろう。ここでの「人」と「もの」との出会いが、人々の人生をより豊かにすることに役立つとともに、県下にマイミュージアムがもっと増えることにも繋がるような期待もある。

生涯学習社会の中で、博物館も多様化し、さまざまな機能を持つことが必要になってきた。参加・体験の重視とかアミューズメント(娯楽性)の導入とかあるが、県博物館マイミュージアムギャラリーは、展示する人の心意気が来館者に感じられるひと味違った施設となることを願っている。(岐阜県博物館長)



全国博物館大会報告

わが国博物館の基盤を再点検する

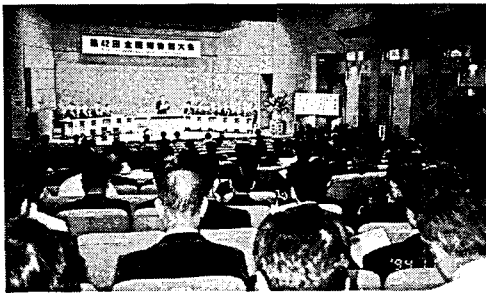
—— 展示を視点に —— をテーマに交流

第42回全国博物館大会が、11月10日・11日の二日間、神戸市の産業振興センターを主会場に開設された。当県からは7名が参加した。

開会式のなかで表彰があり、本県からは名和昆虫博物館の名和秀雄氏が表彰された。

開会式後、文部省生涯学習局社会教育課長長谷川裕恭氏から、博物館数がこの3年で3000館から3700館に増加したこと、博物館事業への参加者が約450万人あり、50%増加したこと、7年度事業に生涯学習情報ネットワークの整備、自然系博物館の専門学芸員の研修、学芸員の資質向上を図るなどの行政報告があった。

午後からは、展示を視点にというサブテーマを受けて、「来館者をリピーターにする効果的な展示」、「特別展・企画展」の在り方について根津美術館の菅原館長の司会でシンポジウムが持たれた。その中で東京大学総合研究資料館館長の青柳正則氏から第1次資料こそ評価の基盤であること、展示こそ情報発信できる場で



あり評価の場であることなどの意見が出された。また、石川県立美術館長の嶋崎丞氏より、現在の博物館は施設第一に陥り、展示等に学芸員無視の例が多いこと。既成の企画展は、集客力はあってもエネルギーだけが消耗し後に何も残らないこと。学芸員の企画・調査研究・協力で出来上がったものこそ大切にしなければいけない

のではないかなど、考えさせられる意見が出された。

青柳氏の言葉を借りれば、予算より学芸員のアイデア、研修が足りないのではないか。視点をマクロからミクロに変えてみるとか、展示技術の研究をする必要があるという、学芸員の資質向上に係わる意見に集約される。

10日の夜は、懇親会も開かれ和気あいあいと交流を深めた。

11日午前中は、先日と同じテーマでフォーラムが開催された。

前日同様、根津館長の司会で進められた。菅原館長からは、来館者の質の変化について「展示室より展示室以外で過ごす時間が増加している」との報告があった。名古屋市科学博物館の三輪氏よりコンピュータについて、特にその利用には、専門家が必要だとする意見が述べられた。コンピュータの博物館における普及率は、42%で、その内容は、資料管理に25%、事務に31%であり、平均8台を保有しているそうである。このフォーラムでも学芸員の在り方が討議された。

午後からは、バスで神戸市博物館、兵庫県立近代美術館、神戸市立青少年科学館を見学した。全体会・閉会式が神戸市立青少年科学館であり、毛利専務理事から事務報告があった。この中で、協会加盟博物館数は平成6年度2059館に達していること、学芸員に係わる諸問題について文部省でも検討を初めているとのことであった。

大会決議では、博物館法改正の推進、学芸員の質的向上と処遇の改善、税制、助成について提案され採択された。

この2か月後、まさにこの会を成功させるために努力した神戸市や関係博物館に大震災が襲おうとは夢にも思ってもいなかった。復興に努力されている関係博物館に対しお見舞い申し上げます。

(岐阜県博物館 安藤志郎)

第30回 会員研修会報告

博物館の動向をさぐる

12月20日(火)岐阜市科学館において、第30回岐阜県博物館協会の会員研修会を開催した。参加者は、18名であった。株式会社丹青研究所顧問の佐々木朝登氏を講師にお願いし、「博物館の動向を探る」というテーマで約2時間にわたりお話をしていただいた。博物館等の文化施設づくりの豊富な経験と長年の調査研究成果を踏まえてのお話で大変興味深く拝聴することができた。以下、話の概略を紹介する。

丹青社は主に博物館のディスプレイを仕事としている。当研究所は常に500館とコンタクトをとりながら情報を収集し研究を続けている民間の研究機関である。所員は約50名である。

さて、日本は博物館後進国といわれて久しいが、文部省の管轄する博物館、文化庁の管轄する資料館その他を合すると、現在5,000館にのぼる施設がある。ここ数年は、1年間に250から300館の割合でできており、人類史的に見ても特異な状況である。ここしばらく戦争がなかったことも大きく作用しているようである。しかし、博物館は、政治的な意味合いでつくられることも多く、10年20年というスパンで考えなければならぬのにどうしても建物指向になりやすい。博物館は、施設でなくあくまで機関であるということを一たび認識したい。

短期的・今日的なイベントと長期的な展望を持ち恒久的な博物館活動の違いがあまり理解されていない。この後者を支えるのが学芸員であるが、学芸員は雑芸員といわれるように本来の仕事になかなか専念できない現状がある。さらに、その数も十分でなく、学校の先生は、1人あたり100㎡の面積を担当しているが、学芸員は、1人あたり300㎡である。ということは、サービスを受ける側にとってみれば3分の1しか情報が得られないということであり、逆に同じ情報を提供しようとすれば3倍忙しいことになる。さらに、博物館には教科書がなく、来館者も子供からお年寄りまで、しかも全くの素人から専門家までと極めて幅広い。単純に3倍忙しいなどといえない状況である。

今後、学校週休二日制や生涯教育への要望などによりますます博物館利用者が増加すると思



われるが、学芸員の充実増加を図らねば博物館の将来は明るくない。ヨーロッパの博物館と比較してもスタッフの数は極めて少ない。

また、集客力を高めるには、多面的な施設になるように心がける。例えば実験に参加してもらったりミュージアムショップを充実させるなど。また、社会の要望に答えるためにも、博物館は情報発信能力を高め、館蔵資料のデータベース化および出版物を出すことが望まれる。博物館についてのさまざまなデータをみると入館者数は職員数や支出された費用と比例関係にあることが分かる。

一方、1970年代からエコミュージアムという考え方がでてきた。博物館は、もともと個人の収集癖からでてきた歴史を持っているために、収集が基本になっている。収集は、「もの」がもともとあった所からごく一部しか持ってこない。すなわち「もの」は、「もの」が持っていた時間とも空間とも切り離され生の姿を失っている。そのため、正確な理解が得られにくい。また、収集ということは一種の環境破壊でもある。ここで従来からの発想を転換し、「もの」を取ってくるのでなく、「もの」がある所へ出かけて見れば良いという考えがでてきた。ある地域を指定し、その地域をまるごと博物館にする。ある地域にある「もの」・「生きているもの(人間も含め)」を、できるだけ本来あるがままの姿で、時間の流れと空間の広がりの中で位置付けようとするものである。このようにエコミュージアムとは、自然・文化遺産などを現地において保存・育成・展示することによって、その地域社会発展に寄与することを目的とした総合博物館である。

(岐阜県博物館 下畑五夫)

第63回公開講座報告

博物館とマルチメディア

と き 平成7年2月17日

ところ 岐阜市科学館

講 師 奥田知安氏

今回の公開講座は(協)岐阜マルチメディア研究所の奥田理事長にお願いしました。協会加盟館園からの参加者が多く、会員21名、非会員11名が参加されました。岐阜市科学館の120インチハイビジョン画面を利用して、新しいマルチメディアの動き等について、分かりやすく話していただきました。

◎ 講演要旨

1. マルチメディアとは

- 魅力あるマルチメディアであるためには、利用者各自が新しい情報を随時付け足したり更新したりできるものではないといけない。
- 1980年代後半にダウンサイジング(=小さいことはよいことだ、という考え)オープン化(=各メーカーの機種間の互換性の高まり)ネットワーク(=業務の企業間横並び分業化)といった新しい社会像が一般化してから、急速にマルチメディアが実現に向けて動きだした。



- 同時に、ここ数年の間に一般の人がマルチメディアを使うことが出来るための新しい技術像がでてきた。アナログからデジタルへ、一方向性からインタラクティブ(双方向性)への転換、ギガを尺度に用いるような大容量の記憶媒体の出現である。
- 新しい技術を使いこなせるようになって、デマンドやVR、CGなどの新しいメディア像が広がってきた。
- 新しいメディア像が理解されるにつれて、新しい価値観が生まれてきた。例えば、パーソナ

ルな価値観である。特定の個人にとってのみ必要な情報も尊重され、早く安価に手に入るようになった。他に、ビジュアルなもの、文化的なものを高く評価する価値観などである。

- マルチメディアを活用することで、人間の能力が拡大された。例えば、異文化と自由に交流する能力、自分が表現したいものを表現する能力、各種の情報を持って運ぶ移動能力である。

2. 国内外の行政の実例

- 交流能力の拡大…ハワイの情報提供システムには、4か国語の言語選択機能がある。日本でも7か国語の選択機能が開発されつつある。
- 厚生省子育て支援システム…全国300か所に設置。提供する情報は、各種項目ごとに個人や民間の機関等が作成することが成功の秘訣。
- 静岡県生涯学習情報提供システム…地域の老人等が各自の特技を生かして分担して情報を作成をしている。

3. 新しいマルチメディアの動き

<バリアフリー>

- 障害者への情報提供方式としては、映像・音声・文字を自在に組み合わせられるマルチメディアは最適。キーボードやマウス、タッチ、視線、瞬き等多様な検索の手立てがある。
- インターネット等の利用により、距離の障壁も解決されつつある。
- 比較的安価で機械翻訳ができるようになり、言語の壁も解決しつつある。

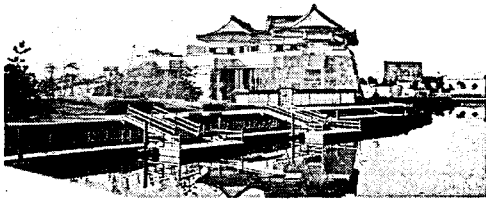
<デジタル・アーカイブ>

- 世界各地の文化遺産や伝統芸能、芸術作品、産業遺跡など、人類が創造し蓄積してきた資産を、デジタル情報の形態で記録し、その内容を分散したデータベースに保管し、通信ネットワークを経由して世界の人が自由に閲覧できる情報システムである。これによって、消滅していく遺産や見学できない遺産などを自由に鑑賞するとともに、国際理解を深めることで異文化間の衝突を回避する構想である。

(公開講座委員 野原 薫)

海津町歴史民俗資料館

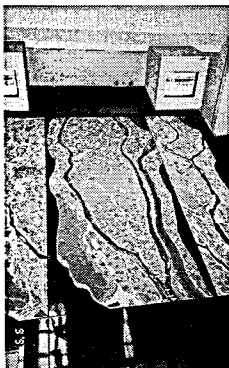
〒503-06 海津郡海津町萱野205の1
TEL 0584-53-3232



木曾三川に囲まれた輪中低地の町—海津町—かつて伊勢湾の浅海底だった海津町域は、その後の陸化と河川の氾濫によって自然堤防が形成され、内側への集落立地と周辺部の水田開発が進められました。しかし海津町は今なお輪中と海拔ゼロメートル以下の低地の町です。

私たちは、祖先が水と闘いながら郷土を築き上げてきた苦闘の歴史を遺し、郷土を更に発展させなければならないという願いから平成5年5月に当資料館を設立いたしました。又当町の中心市街地の高須町は、江戸時代徳川御三家の尾張徳川家の分家である松平家の城下町であり、今もその面影を残しています。3万石の小禄ながら名門の誉れ高く、多くの名君を輩出しました。当館の3階は、高須松平候御館の一部を復元したものです。

輪中と低地の農業

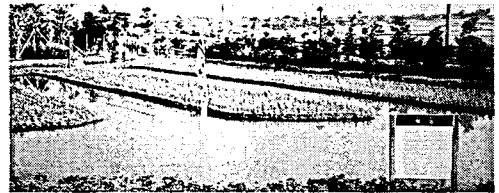


木曾川・長良川・揖斐川に囲まれた高須輪中は、明治の河川改修によって大きくその姿を変えました。河幅を広げ河道を修正し新長良川・新木曾川を開削し、支派川を締切り完全に分流するという大工事だったのです。高須輪中大地形模型では、その様子が一目で分かる

ようになっています。

輪中地内の人びとは、永年水との闘いの中で独自の生活様式や文化を生みだしました。

洪水に備えて盛り土をし、石垣を組んだりして屋敷を高くし更に一段と高くした所に避難所「水屋」を建てました。そのほか「助命壇」という共同の高台の避難場所もありました。そして家屋にも独特の工夫が凝らされています。洪水時の避難用の舟を軒下などに吊るした上げ舟、滑車を使って仏壇を屋根裏へ引き上げるしくみをもった上げ仏壇などがあります。屋外には、この地独特の水田で、生産性を高めるために作られた堀田が復元されています。



高須藩御殿と能舞台

3階の御殿には、御玄関から書院、上此の間、山吹の間に至る主要部分が復元されています。

又、資料館としての機能を多面的に持たせる為の能舞台では、能狂言の公演を始め、謡・仕舞など古典芸能を愛する方々に使用されています。一度御来館ください。



◇交通 ・国営木曾三川公園から車で北へ15分

◇開館時間 ・午前9時30分～午後5時

◇入館料 ・大人300円 小人150円

(団体は30人以上割引あり)

◇休館日 ・毎週月曜日(祝日と重なる場合はその翌日)及び年末年始

(海津町歴史民俗資料館長 安藤 勉)

鵜飼資料園

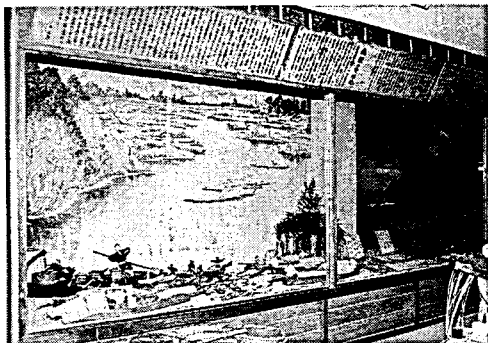
〒502 岐阜市長良中鵜飼

TEL (058)232-2839

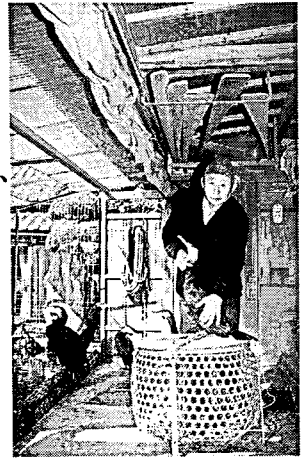
岐阜の夏の風物詩、長良川の鵜飼。伝えられてきた鵜匠の技と鵜が一体となって織りなす漁法は、職人の域を越えひとつの芸術とも讃えられる。その伝統を引き継ぐ鵜匠のひとり、山下純司鵜匠宅に当園がある。長良橋の上手、鵜飼のクライマックス、「総がらみ」が夜毎行われる地点より、少し奥まった所に位置する。

門をくぐると左前方の鳥屋の中で二十数羽の鵜が遊ぶ。外脇には鵜籠など使用中の道具が置かれ、その右奥には餌飼舟を中心とした道具類とジオラマが処狭しと陳列されている。現在も使用される道具や鵜も取り込んだ“生きた資料館”である。ジオラマは、先代が療養中にリハビリテーションを兼ねて作られたものである。金華山を背景に鵜飼の様子や餌飼の姿を細かく再現してある。鵜飼の将来を思いながら製作に当たられた先代の意気込みが伝わり、観る者を楽しませてくれる。鵜匠の手作りの作品であるだけに貴重である。資料園は模型の有効な利用を考えた結果生まれたもので、道具や関連資料を整え、昭和51年に開園された。

園には、観光客や社会見学のほか、俳句の会、絵画グループなどの趣味同人がモチーフを求めて来園されるそうである。山下鵜匠はそんな来



園者に「鵜飼に従事する人間の生の声を訴えたい。」と話される。鵜匠の語り口は純朴で、お話は鵜匠歴二十余年の経験が滲み出るものである。鵜匠から直接お話を伺うことが肝要であり、その点が園の最大の特徴な



ので、多くは紹介しないが、お話は「鵜との共生」とでもいうべき話を中心に、漁場でのエピソードや鵜飼の将来まで広がる。それは「鵜は養殖が不可能で、不足が生じれば野生鵜を捕獲し、調教する。この鵜は人類が鵜飼という漁法をはじめた時と同じ野性を持っている。人間を取り巻く環境は大きく変化し、鵜飼道具も進歩した。鵜を操る人間も変わってしまったが、鵜だけは生来のままである。鵜飼の第一歩は鵜との信頼関係を築くことにあり、そこには環境変化や道具の進歩が入り込む余地は無い。高度に文明が発達した現在であるからこと、鵜を通じて自然との人間の付き合い方を考えていきたい」といった内容である。鵜匠ならではのお話ばかりで、来園の方には是非聴いて欲しい。時間が許されれば、鵜を使った実演も行なうとのことである。御不在の場合もあるので、連絡を入れてからの観覧が良いであろう。

隣には鵜匠が経営される喫茶店「鵜」がある。「鮎ぞうすい」など鵜匠の喫茶店ならではのメニューが揃っている。鳥屋の鵜を観ながら鵜匠の家の味を堪能できるのも、また楽しい。

◇交通 バス・長良橋經由乗車、長良橋北詰バス停「鵜飼屋」下車、川添い徒歩5分

◇開園時間 午前9時～午後4時

◇観覧料 無料

◇休園日 第2・4日曜日 年末年始

(機関紙委員 岐阜市歴史博物館 横田 宏)